

Generalized growth conditions and convexoid operators

弘前大. 理 古 田 孝 之

1. ここでは、複素ヒルベルト空間 H 上の有界線形作用素 T を取り扱うことにする。通常の growth condition なる概念を少し変えて、次のような定義とする。

定義 1. T が growth condition (G_1) for (M, N) をみたすとは次の条件を満足することとする；

$$(*) \quad \|(T - \mu)^{-1}\| \leq \frac{1}{d(\mu, M)} \quad \text{for all } \mu \notin N$$

ここで M, N は $N \supseteq M \supseteq \sigma(T)$ なる closed sets であり、 $\sigma(T)$ は T のスペクトラムを示す。このとき T を $T \in (G_1)$ for (M, N) と略記することにする。又 $(*)$ の等号をみたす作用素を $E-(G_1)$ for (M, N) と表わし、このときの T を、 $T \in E-(G_1)$ for (M, N) と略記する。更に条件 $(*)$ の左辺の作用素、 $\|\cdot\|$ を numerical radius norm $w((T - \mu)^{-1})$ に置きかえたとき不等式の成り立つ作用素を $(w-G_1)$ for (M, N) と表わし、このときの T を、

$T \in (W-G)$ for (M, N) と略記し、かつ等号をみたす作用素を $E-(W-G)$ for (M, N) と表わし、このとき T を $T \in E-(W-G)$ for (M, N) と略記する。

上の定義 (G) for (M, N) において $M = N$ のときは、T. Daito の意味の (G) for M のことである。さて numerical range の closure $\bar{W}(T)$ と、spectrum の convex hull $\text{co } \sigma(T)$ とが一致する作用素 T を convexoid 作用素と呼ばれているが、この作用素 T の特性化を, Orland とは一寸異なる形で与え、この応用の一として、G. R. Luecke と M. Fujii が構成したある二つの convexoid 作用素を含む更に広い convexoid 作用素を generalized growth conditions の立場から考察してみようことにしたい。

2. 後の議論のために、次の明らかな結果を整理しておくことにする。

Proposition 1. Any one of the following conditions is necessary and sufficient in order that T is convexoid :

- (i) $T - \mu$ is spectraloid for all complex μ ,
- (ii) $T - \mu$ is spectraloid for all complex μ whose absolute values are sufficiently large,
- (iii) $T \in (G)$ for $\text{co } \sigma(T)$,

- (iv) $T \in (G_1)$ for $(\text{co } \sigma(T), N)$,
 (v) $T \in (W-G_1)$ for $\text{co } \sigma(T)$,
 (vi) $T \in (W-G_1)$ for $(\text{co } \sigma(T), N)$.

ヒルベルト空間上の作用素 T は、一般に次の不等式を満たすことは良く知られている;

$$\frac{1}{d(\mu, \sigma(T))} \leq \| (T - \mu)^{-1} \| \leq \frac{1}{d(\mu, W(T))}$$

ただし左辺の不等式は for all $\mu \notin \sigma(T)$ についてであり、同様に右辺の不等式は for all $\mu \notin W(T)$ についてある。Luecke は右辺の等号成立の作用素について考察した。

定義 2. $T \in \mathcal{R}$ とは、次の等式が成立することである;

$$\| (T - \mu)^{-1} \| = \frac{1}{d(\mu, W(T))} \quad \text{for all } \mu \notin \overline{W(T)}.$$

Theorem A (Luecke). $T \in \mathcal{R}$ if and only if $\partial W(T) \subset \sigma(T)$ where ∂M is the boundary of M .

Luecke は上の theorem A を示し $T \in \mathcal{R}$ は convexoid 作用素であることを示したが、この class \mathcal{R} は、 H が有限次元のときと異なり、identity の scalar 倍で構成されるため、一般の normal

operator を含まない。そこで、Fujii は次のように定義をい、 \mathcal{R} と (G_1) を含む class (H_1) を構成した。

定義了、 $T \in (H_1)$ とは $T \in (G_1)$ かつ $\tilde{\sigma}(T)$ が成立する ことである、 \Rightarrow は $\tilde{\sigma}(T)$ とは non-spectrum と呼ばれ、 $\sigma(T)$ の complement $\sigma(T)^c$ の unbounded component の complement を示す。

更に Fujii は次の結果を示した。

Theorem B (Fujii). $T \in \mathcal{R}$ if and only if $\bar{W}(T) = \tilde{\sigma}(T)$.

上の Theorem A, Theorem B とともに $T \in \mathcal{R}$ なる T が "convexoid 作用素" であることは幾何学的に示している興味ある結果であるが、
このことは、定義 1 と Proposition 1 とより別な考察をしてみよう。

Theorem 1. Any one of the following conditions is necessary and sufficient in order that T belongs to \mathcal{R} ;

- | | |
|---|--|
| (i) $T \in E-(G_1)$ for $\bar{W}(T)$, | (iv) $T \in E-(W-G_1)$ for $\bar{W}(T)$, |
| (ii) $T \in E-(G_1)$ for $(\cos \sigma(T), \bar{W}(T))$, | (v) $T \in E-(W-G_1)$ for $(\cos \sigma(T), \bar{W}(T))$, |
| (iii) $T \in E-(G_1)$ for $\cos \sigma(T)$, | (vi) $T \in E-(W-G_1)$ for $\cos \sigma(T)$. |

$T \in \mathcal{R}$ の特性化として, numerical range と $\sigma(T)$ の相互関連を geometrical により表現したものが, Theorem A, Theorem B でありともに \mathcal{R} が convexoid 作用素の subclass をなすことを示している。一方 Theorem 1 は次のように考えられる, つまり「convexoid 作用素がみたす growth condition (G_1) for $\cos(T)$ (或は (G_1) for $(\cos(T), \bar{W}(T))$) という不等式における "等式" が, 成立する作用素 T , それらが \mathcal{R} を構成している」と。この意味で Theorem A, Theorem B が "geometrical characterizations" と考えられるのに対して, Theorem 1 は "characterization in formula" とみ考えられることに注意。これにより確かに Theorem 1 も \mathcal{R} が convexoid 作用素の subclass であることを "式" の上での厳格に示していることが判った。

3. 次に新しい convexoid 作用素の一つの class を定義しよう。
 (H_1) は \mathcal{R} と (G_1) の双方を含む convexoid 作用素であるが, この (H_1) を含む convexoid 作用素 \mathcal{S} を定義しよう。

定義 4. $T \in \mathcal{S}$ とは, $T \in (G_1)$ for $(\sigma(T), \bar{W}(T))$ をみたすことにある。つまり $(T - \mu)^T$ が normaloid for all $\mu \notin \bar{W}(T)$ のことである。

Theorem 2. $(H_1) \subset \mathcal{S} \subset C$ and these inclusion relations are proper, where C is the set of all convexoid operators.

実際上の定理をみたす \mathcal{S} は次のように構成される。

Theorem 3. If A is an operator and B satisfies (G_1) for $(\sigma(B), \bar{W}(B))$ such that $d(\mu, \sigma(B)) \leq d(\mu, W(A))$ for all $\mu \in \bar{W}(B)$, then $T = A \oplus B$ also satisfies (G_1) for $(\sigma(T), \bar{W}(T))$.

又 Theorem 2 の inclusion relations が proper である例は実際作れることがわかる。更に \mathcal{S} が convexoid 作用素の subclass であることは、Proposition 1 より明らかである。

定義 5. 作用素 T が numeroid であるとは、 $\bar{W}(T)$ が T の \rightarrow の spectral set になることである。

Proposition 2. There exists a numeroid which does not belong to \mathcal{S} and vice versa.

上の Proposition 2 により "there exists a normaloid which does not belong to \mathcal{S} and vice versa." という系は成り立つ。

なりませう。

4. 定義1にみたてた作用素の一般的な construction method を与える結果を示すことにします。

Theorem 4. If A is an operator, X and Y both closed sets in the complex plane and B satisfies (G_1) for $(\sigma(B), Y)$ such that for all $\mu \notin Y \supset X$,

$$d(\mu, X) \leq \min \{ d(\mu, W(A)), d(\mu, \sigma(B)) \},$$

then $T = A \oplus B$ satisfies (G_1) for (X, Y) in the generalized growth condition.

上の定理で $d(\mu, X) \leq d(\mu, W(A))$ が essential であり、これは $d(\mu, X) \leq d(\mu, \sigma(A))$ for all $\mu \notin Y \supset X$ でありかえることは、できないことは、次の結果が示している。

Proposition 3. If X and Y are both closed sets in the complex plane and A does not satisfy (G_1) for (X, Y) such that for all $\mu \notin Y \supset X$, $d(\mu, X) \leq d(\mu, \sigma(A))$ and there exists a $\lambda \notin Y$ such that $d(\lambda, X) > d(\lambda, W(A))$, then $T = A \oplus B$ does not satisfy (G_1) for (X, Y) whenever B satisfies (G_1) for $(\sigma(B), Y)$ such that the following property holds ;

$$d(\mu, X) \leq d(\mu, \sigma(B)) \quad \text{for all } \mu \notin Y \supset X.$$

5. 又三節では \mathcal{R} と (\mathcal{G}) と共に含む (\mathcal{H}) を subclass として含む更に広い \mathcal{C} の \mathcal{C} -normaloid 作用素を構成したが、 $\mathcal{C} \supset \mathcal{R}$ は \mathcal{R} 也 (\mathcal{G}) に含まれる更に狭い \mathcal{C} -normaloid 作用素の class \mathcal{P} を構成しよう。

定義 6. $T \in \mathcal{P}$ とは $\overline{W}(T) = \sigma(T)$ 且 T が \mathcal{R} に属することをいう。

上の class \mathcal{P} に属する代表的な例は unilateral shift 作用素である。

Theorem 5. If A is an operator and B belongs to \mathcal{P} (resp. \mathcal{R}) such that $\sigma(B) \supset \overline{W}(A)$ (resp. $\tilde{\sigma}(B) \supset \overline{W}(A)$), then $T = A \oplus B$ also belongs to \mathcal{P} (resp. \mathcal{R}).

Remark 1. Luecke は "if A is an operator on H , then $A \oplus N \in \mathcal{R}$ on $H \oplus K$ whenever N is a normal operator on K with $\sigma(N) \supseteq \overline{W}(A)$ " を示してゐるが、 $A=1$, $N = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}$ ととり、 $T = A \oplus N$ と定義すれば、 N は normal 且 $\sigma(N) = \{1, 2\} \supseteq \overline{W}(A) = \{1\}$ であるが、この normal 作用素 T は \mathcal{R} に属さず、 \mathcal{C} は $\overline{W}(T) \not\subset \sigma(T)$, つまり $\overline{W}(T) \neq \tilde{\sigma}(T)$ であるから、Theorem A, 又は Theorem B より明らかである。つまり Luecke の結果は insufficient である。定理 5 のようにおぼえておくと考へられる。上の定理の正解は \mathcal{P} と \mathcal{R} とは、 $\sigma \rightarrow \tilde{\sigma}$ にあてかえれば、parallel な結果が得られる。

Theorem 6. $P \subset (G_1) \cap R$ and this inclusion relation is proper.

Remark 2. Luecke は "if A is an operator and B normal operator such that $\sigma(B) = \overline{W(A)}$, then $T = A \oplus B$ belongs to (G_1) " といふ (G_1) に属する T の構成法を示してゐるが、実は、Theorem 5 によつて (G_1) より狭い class である P に属する T が解る。更に彼が具体的に構成した (G_1) にも見にも属する作用素の例は実は P に属する T が解る。そこで彼の結果と上の事柄を合わせれば、次の結果を得る。

Proposition 4. There exists an invertible operator belonged to P such that

(i) $T^2 \notin (G_1)$ and $T^2 \notin R$, (ii) $\kappa(T) < \|T\|$ (non-normaloid) (iii) $T^{-1} \notin (G_1)$ and $T^{-1} \notin R$.

次は $T \in Q$ とは $\tilde{\sigma}(T) = \cos \sigma(T)$ なる T のこととし、又 $T \in U$ とは $\sigma(T) = \cos \sigma(T)$ なる T , $T \in V$ とは $\tilde{\sigma}(T) = \sigma(T)$ なる T のことと定義する。

Theorem 7. $P = V \cap R = C \cap U = V \cap Q \cap C$, whose C is the set of all convexoid operators.

次の結果は convexoid 作用素の各 class である $C, S, (H_1), (G_1), R$

及 $v \in P$ と u の関係を示している。

Theorem 8. If T has a convex spectrum, i.e., $\sigma(T) = \text{co } \sigma(T)$, then the following statements are mutually equivalent:

- (i) T is convexoid, (iii) $T \in \mathcal{S}$,
- (ii) $T \in (H_1)$, (iv) $T \in \mathcal{R}$,
- (v) $T \in (G_1)$, (vi) $T \in \mathcal{P}$
- (vii) $(T - \mu)^{-1}$ is spectraloid for all $\mu \notin \overline{\sigma}(T)$,
- (viii) $(T - \mu)^{-1}$ is spectraloid for all $\mu \notin \tilde{\sigma}(T)$.

Proposition 5. $T \in \mathcal{P}$ is a spectroid if and only if there is a strong normal dilation N of T with $\overline{\sigma}(N) = \sigma(T)$.

Remark 3. 上の proposition $\mathcal{P} \rightarrow \mathcal{R} \stackrel{4.2}{=} \text{spectroid} \rightarrow \text{non-spectroid}$ と
 すれば $\sigma \rightarrow \tilde{\sigma}$ と "う結論" がある = これは Fujii によつて示さ
 れている。このように $\mathcal{P} \rightarrow \mathcal{R}$ なる対応は $\sigma \rightarrow \tilde{\sigma}$ なる対応
 に適合し、Theorem 5 とも示されたように parallel な結果とみ合
 ちることが出来る。更に " $T \in \mathcal{Q}$ is a numeroid, then T is a non-spectroid"
 に対して " $T \in \mathcal{U}$ is a numeroid, then T is a spectroid" と "う
 結果も、これらの路線の延長上にあるとみ合せらる。

6. 又一節の定義 1 の (b) の operator norm を numerical radius norm を含む更に一般的なる "operator radii" である $w_p^0(T)$ にかきかえて議論を進めてみることも成りの部分にはたし可能であるが、紙面の予定を割り愛する。(こゝに $w_p^0(T)$ は g -dilation に関係して定義される)

References

- [1] Fujii, On some examples of non-normal operators. I, II and III, Proc. Japan Acad., 47(1971) 458-463, 48(1972) 118-123, and 48(1972) 124-129.
- [2] Furuta, Generalized growth conditions and convexoid operators (to appear).
- [3] G. R. Luecke, A class of operators on Hilbert space. Pacific J. Math., 41 (1971) 153-156.